

グループ名 八王子市立宇津木台小学校

代表者名 富所 博

電話番号 042-691-2146

研究テーマ 聴き合い学び合う授業の創造

～学校・地域・子供をつなぐ「学びの共同体」づくり～

研究期間 平成26年4月3日から平成27年3月3日

研究結果の概要

平成24年度、25年度八王子市教育委員会研究指定校の研究成果の上に立ち、平成26年度も『聴き合い学び合う授業の創造～学校・地域・子供をつなぐ「学びの共同体」づくり～』をテーマとした校内研究が、同僚性の構築と教師の専門性の向上をねらいとして展開された。

校内研究を学校経営の中核に置き、「一人一研究」、「全教員による授業研究」、「コの字型やグループ学習による授業形態の導入」など、従来の校内研究とは異なる手法を取り入れながら、一つ一つの授業研究を丁寧に行ってきた。

今年度は、26名の教師による授業研究が、全体授業9回、分科会別授業11回、VTRによる授業研究6回と様々な形態の中で実施された。それぞれの授業を創り出すための指導案の検討もさることながら、授業後の研究協議会でのテキストと子供のかかわり、子供同士のつながり、個々の子供の学びの事実などが深く交流された。研究協議会における一人一人の教師の語りのなかに、一人一人の子供を大切にするという視点が豊かに含まれていた。

今年度の外部講師は、国語科の専門家である印南圭子先生（元羽村市教育委員）、学びの共同体研究会にかかわる七木田文彦先生（埼玉大学准教授）、庄司康生先生（埼玉大学教授）、杉山二季先生（東京大学特任助教）、秋田喜代美先生（東京大学大学院教授）、佐藤学先生（学習院大学教授）の6人の先生方から、11本の授業について詳しく見ていただき、研究協議会のなかで、授業のデザインや教師の「聴く、もどす、つなぐ」の在り方、ジャンプのある学びの設定の仕方、子供の学びの見取り方など、きわめて重要な指摘を具体的にいただくことができた。授業研究にかかわる研究者や実践家から提起される課題は、本研究を継続的に深めていくうえで、不可欠なものとなった。また、佐藤学先生と庄司康生先生には、研究授業以外のすべての学級を見ていただき、ペアやグループの学習がすべての学級で行われ、子供同士の自然な関わり合いや学び合う様子について、大きな成果だと評価していただいた。日常的な学び合う姿の追求が、一つ一つの研究授業の成果につながっていることを示すものであった。

研究内容としては、低学年の算数の授業において、ジャンプのある課題を見出し、数量のおもしろさに気づかせる授業、テトロミノを使って多様な四角形を構成する授業など、文字通り子供たちが夢中になって授業に取り組む姿を見事に創り出していた。昨年度のタングラムの授業に続く、この一連の流れは、算数の授業においてジャンプのある課題をどう設定し、どのように授業をデザインすればよいのかについて、本校なりのアプローチができるようになった証と考えられる。そうした見通しが全教職員に共有されたことは、大きな成果であった。一方、国語科の文学の授業については、文学教材への向き合い方や文学の世界を味わうことの意味、子供がテキストをどのよ

うに丁寧に読み、互いの意見の違いを尊重しながら読み進んでいくのか等々、従来の国語科教育の在り方を乗り越える視点について、まだ十分な協議が進んだとは言えず、大きな課題として残される結果となった。アートとしての文学をどう子供たちと読み味わうのか、今後の研究の進展に期待したい。

2月の第4回公開研究会には、全国から学校関係者を迎え、全校児童による合唱や2本の提案授業、全学級の公開授業を見ていただいた。多くの参観者から響き合う歌声の素晴らしさや子供たちの自然な関わり合いや聴き合う姿、落ち着いて夢中になって学んでいることへの称賛の声をいただいたが、5年間にわたる「学びの共同体」づくりの地道な努力の成果だと捉えている。

一人残らず全ての子供たちの学びを保障したいと願う教職員の同僚性が子供たちを豊かに支え、保護者や地域の方々が「学習参加」の形で、子供たちを包みこんできた。

今年度を含め5年間で133回にわたる研究授業が積み重ねられることによって、子供も、教師も、保護者や地域の方々も、共に学び合い育ち合う関係ができてきている。この研究をさらに継続し、一人一人の子供の尊厳と教材の発展性、教師の教育哲学の3つの規範を大切にす授業づくりを追求していきたい。その誠実な営みこそが、一人一人の子供たちの幸せにつながると確信している。